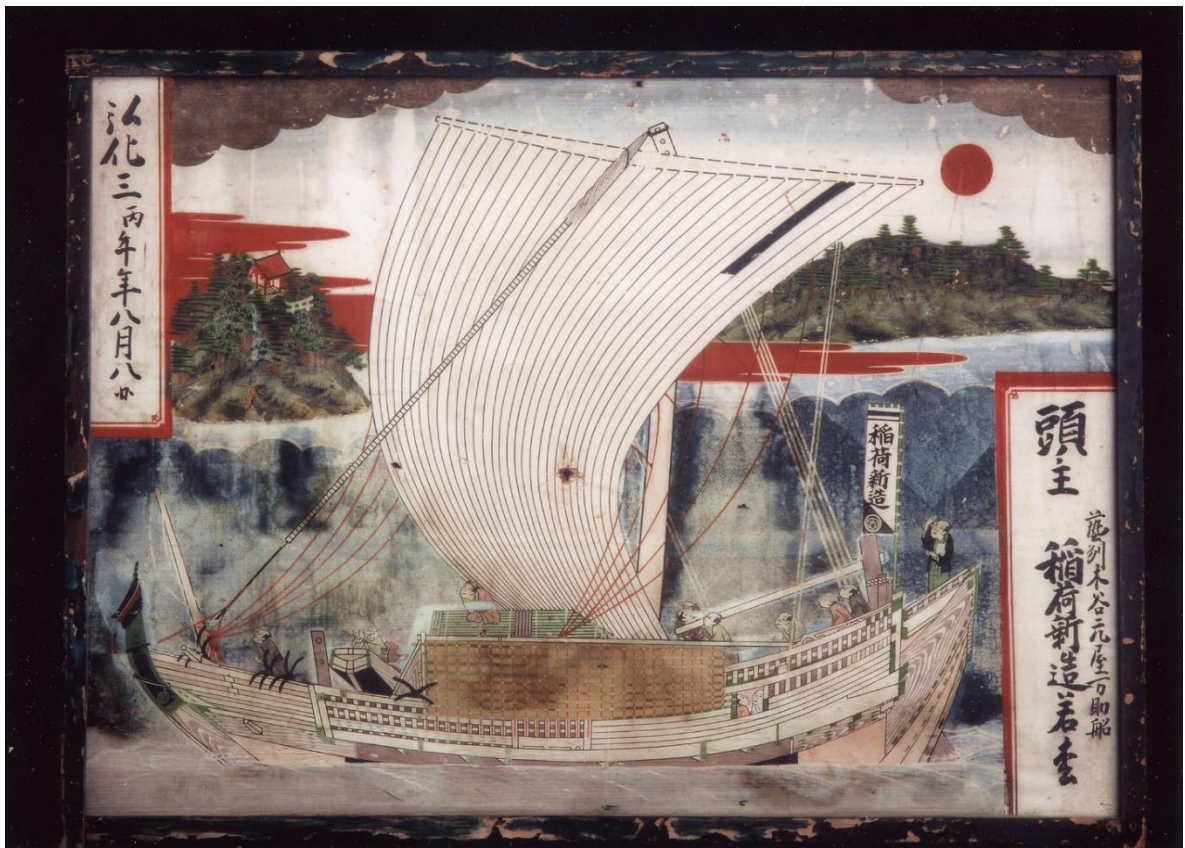


◎ 航海の安全祈願



船絵馬<稲荷新造>

みくに龍翔館（福井県）所蔵

船主や船乗りは、航海の無事とたとえ遭難しても命だけは助かりたいと神仏に加護を求める切なる願いを絵馬に託した。

元屋は、弘化3年(1846)に「稲荷新造」という1600石級の

船の絵馬を、福井県坂井市の大湊神社に奉納している。現在は「みくに龍翔館」に移設展示されている。

木谷では、文化13年(1816)航海の安全を祈願する地蔵菩薩が西之谷雲毛地区に安置された。



◎ 善松漂流記（夷蛮漂流帰国録）

文化3年（1806）、8人が乗った500石積みの船が江戸から木谷に帰る途中遠州灘で遭難。七十日余の漂流の末、外国船に助けられハワイに到着。100日余り滞在の後、マカオやバタビアなどを経由しての帰国となったが、途中で亡くなる人が続出。生きて木谷に戻れたのは平原善松という水夫（かこ）ただ一人であったという実話で知られる稲若丸は元屋の船である。

◎ 守護神・稲荷神社



木谷光保家（屋号：元屋）の今日あるのは、今より五代前の主人の時、小舟に乗っていた時に、にわかに一匹の老狐が来て言うには、「是より伏見稲荷に詣り、位（くらい）を受けたいと思うので、便船させて頂きたい」と頼んだ。彼の主人（船頭）、善

根の人なれば快くこれを承諾した。このことがきっかけで、これより海運発展、天下の御用船となり、日本全国番なしの特権を有するに至った。ついに廻船方頭取となった。これより多くの持船は、稲荷丸・稲徳丸等と名付け、益々繁昌して、子孫連々今に至ると言い伝えられている。

(木谷村郷土誌 大正15年6月編より)

芸藩通志によるとこの稲荷神社は、「勧請年月日は詳かならざれども此の谷奥に鎮座し玉ひける。弘化2年(1845)11月に城州本宮に請い改めて、安

鎮座を奉修せり」と書かれている。

伏見稻荷の本宮参拝により、光保一族の船がことごとく航海が良好だったために、船の名称に稻の字を当てた(稻荷丸、稻荷新造、稻若丸等)。

現在鎮座しているのは、元屋の屋敷跡裏の竹やぶに囲まれた山中である。9月20日の例祭日には、近所の有志の方々がお祭りをされている。

大正7年(1918)光保理三吉の時代に「広島市研屋町 森岡末松」という職人に現在ある立派な神殿をつくらせている。

この時に以前あったという場所=通称「塔の迫」(有志である土居教治氏が鳥居を復元されている)から、現在の土地(大字木谷土居)へ移築(新築)したことになる。

◎ 明治天皇御真影拝戴式



明治天皇御真影拝戴式が挙行された

明治43年(1910)5月5日、
「明治天皇御真影拝戴式」が挙
行された。参列者は村民代表、
行政関係者、学校関係者などで
あった。式場は近隣町村では学
校であったが、木谷は村役場(元
屋)であった。式後、一般の人
たちにも拝謁(はいえつ)が許され
た。児童は着物姿で当時の生活
様式を垣間みることができる。